A Round-Table with Prof. T. Yamanobe

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17676

山辺知紀先生を囲んでの座談会

参加者：山辺知紀，橋本哲哉，西田美昭，野村真理，中島健二，弁納才一
日　時：2004年12月13日16：00～17：30
場　所：金沢大学経済学部会議室

橋本　まず簡単に山辺さんの紹介をします。山辺さんは1969年４月に京都大学大学院経済学研究科博士課程を中退した後，金沢大学法文学部経済学科の助手として赴任されましたので，今年でちょうど35年になり，山辺さんの人生の過半を金沢大学一筋で生きてこられたわけです。途中，1980年４月の経済学部創設後，経済学部助教授・教授として現在に至っています。私事になりますが，私は1971年10月に山辺さんの１年半遅れで金沢大学に着任したので，山辺さんの人生の過半と私の人生の過半と重なるわけでして，私自身のことも思い出しながら，インタビューさせてもらいます。ご承知のように，山辺さんは一貫して経済学史を担当されてここまできたわけですけれども，今日のインタビューでは山辺さんの研究面，教育面そして大学における生活，そのような３つの面からアプローチしてみたいと思います。

山辺さんの研究面については，僕は専門的になかなか切り込めないけれども，今朝あわててざっと振り返ってみたところ，1990年代前半くらいまでとそれ以降の2つに分けて，1990年代前半までは簡単に紹介し，また，この10年間ぐらいについては山辺さんが最近本をまとめられたので，それを中心に話していただこうと思います。以上は僕がかなり独断で山辺さんの研究歴を整理しました。

山辺さんは経済学史・理論の研究者として金沢大学に来て，僕は歴史学で育てられてきて，捉え方は大きく違いますし，物の考え方というのも大きな違いがあったと思います。特に若い時代にはそれがより顕著で，議論までいかなかったかもしれませんね。互いの違いを違いとして認識するというような程度で，あまり交流はなかった。その時僕の印象にあるのは，若い頃，山辺さんがフォイエルバッハについて書いたものを見て，なんでこんなものを書くのかなと疑問に思いました。しかし，大胆に整理すると，フォイエルバッハの宗教批判と言うかキリスト教批判を読み込むことによって，近代市民というようなものを山辺さんは考えようとされていたのかなと思います。その後は，フォイエルバッハについては書いておられないのではないかと思います。そして，続いてスミスについていくつか書いておられて，これは『国富論』が題材になっていたので，僕もある程度わかったし，読めたような気がします。それに続いてミルについてずっとやられて，それが一区切りついたということで，経済学部研究叢書で『社会概念の成立と古典派経済学』をまとめられたんだと思います。たぶん最初から持っていたような近代市民像といったようなものを社会や国家との関係でスミスやミルを題材に使って整理するというような仕事をなさった。これは非常に勝手な整理です。うろ覚えですが，研究叢書のあとがきで敵役として私の名前も出していただいた。宮田さんとともにここに長くいた人間の存在意義のようなものを書いていただいて，赤面しました。1990年代前半までのところで何か思うところを，話して下さい。

山辺　僕が大学院の時，フォイエルバッハの研究を始めたころだったと思いますけど，高島善哉の書いていた文章の中に説明は全然抜きに「フォイエルバッハはドイツのスミスである」と書いてあったんですが，これは何だろうとずいぶん悩んだことがあった。今思うと，意外とそれがフォイエルバッハを研究してスミスを研究するのにつながっていたのかなという気がします。スミスをやり始めた理由というのは，そんな立派な理由ではなくて，こんなところです。その上経済学史を講義しなければならないので，それならスミスをやらなければということで始めて，始めたころは『国富論』は読み

にくかったし，『道徳感情論』から入っていった。でも，正直に言ってあれも全然つまらなかった。ドイツ観念論中でも，ヘーゲル，マルクス，フォイエルバッハをずっと読んできて，そしてスミスに突然入っていって，なんでこんなすかすかな文章でいいんだろうと思いました。それがすごく抵抗があって，なにか自分で書いても，最初の論文というのは，それほどスミスに対して好意的ではなかったと思いますね。でも，それを読んでいる時に，大田可夫さんとか，ああいう人たちのイギリス社会哲学というものを読んでいるうちに，案外と面白いなというふうに途中から変わったんですね。自分が今まで持っていたドイツ観念論の文献の見方というものが，やはり，スミスの中でも使えると感じられ始めた。僕の中でスミスというのは，それまで付き合いにくかったなと思っていたのに，1980年代に入った頃かな，段々付き合い易くなってきた。そして同時に自分も変わった気がします。それでちょうどその頃じゃないですかね，橋本さんなんかと一番ぶつかってきたのが変わり始めてきたのは。スミスの『道徳感情論』の中に仁恵の美徳というのがあるんですが，これが一体何なのか，あまりよくわかない。大体，スミス研究の中ではあまり重視されてこなかったことだったと思うんです。正義とか慎慮は有名なんだけど。『道徳感情論』の第六版の中に付け加えられた部分なんだけれども，man of system（主義の人）というのが出てくるんです。そういう人間に対して，仁恵にあふれた人間というのを対置させる議論があります。主義の人というのは，人間社会というものに対して，まるで将棋盤の上で将棋さしが将棋の駒を動かすように作ってしまう。だから，自分の体系を作ったら，そこに全部びしっと合わせてしまおうとする。でも，人間というのは将棋のさし手が将棋の駒に与える以外の方向にも動く。だから，こんなものはすぐに悲劇的な結果にしかならない。それに対して，仁恵にあふれる人間というのは，どういうことをやるかというと，理性と説得によってそういう偏見とか誤りというものを正すことができない場合には，あえてそういう偏見に妥協していくという話をする部分があるんです。こういう議論をするというのは，昔だったら嫌いでたまらなかったんだけれども，ある時期からこれがやはり必要なんじゃないのかなと思うようになった。これは，ミルの精神的危機の引き金にも通じている。ミルの精神的危機というのは，功利主義者としてずっと育てられてきたミルがちょうど20歳くらいの時にぱっと自分の過去を振り返ってみて，今，自分が理想としているものがこの世の中に実現されたとしたら，自分はイエスと言えるか，ノーなのか，自分に問いかけてみる。ミルはそれに対してノーだと答えていく。そこから彼は

精神的危機に陥ってしまった。その理由というのは，自分たちが造ってきたベンサム主義なり功利主義というのがあって，一本でばーんと押していった時に，そこからはずれるものが必ず出てくる。ここの部分というのを全部取り去ってしまって社会というのは成り立つかというと，成り立たない。スミスもミルもそうなんです。ミルも彼自身は父親からベンサム主義をたたき込まれて，リカードの講義も受けて，『国富論』に対しては反面教師として12・13歳頃に父親から教えられるんです。非常に若いうちに『国富論』を読まされて批判しろと言われて，スミスに対しては全く評価してなかった。しかし彼は最終的にはやはり『原理』を書いた時でも，『国富論』の次に，それを引き継ぐという形で，自分の『原理』を書いたといっている。だから，そう考えてみると，意外とイギリスの経験論の一番健全なパターンというのはそういうところがずーとつながっているんじゃないのかな。自分はそういう気がします。僕自身がスミスにシフトしていって，スミスが読めるようになってきたというのはそんなところです。そして，そうやって読み始めると，今までのスミス解釈というのがどうも納得がいかなくなってきた。それまでのスミス解釈というのは，内田義彦さんとか講座派の考えが基準となって読んでいくというところがあった。その内田スミスみたいなもので見ていくと，スミスの中に見ているものは，資本主義的生産様式というものへの認識がどうかという格好で見ていかざるをえない。スミスの価値論なり生産的労働論なりというものがそこから見られる。どうも違うんじゃないかなと思った。それが自分の中にあって，これを全部まとめたのが1980年の終わり頃の『社会概念の成立と古典派経済学』というものです。そこで出てきた世界のイメージというのがさっきに言ったことにもつながっているようなイメージです。ですから，橋本さんが言われた近代的市民という話は僕もずーと思っていたことです。それはだんだんとスミスなどを使ってふくらんでいった。大体そんな形できました。

中島　スミスをこのように説くことによって内田的スミスに対して反発し，それとは違うものをスミスに見出そうとしたあたりのところをもう少し聞きたかったですね。

橋本　その辺については何か書いているの。

山辺　僕は，生産的労働論とか地代論把握とかで，あの本の中で内田さん批判をしました。そのおかげで経済学史学会の部会報告で違う報告やっているのに，「山辺さんの内田批判は…」と全然違うところで批判されたこともあります。

野村　山辺先生は，フォイエルバッハからアダム・スミスの道徳感情論へと研究対象を移してゆかれたわけです

が，先生は，フォイエルバッハの人間学とスミス的人間学というか，人間観と，どちらに魅力を感じられますか。フォイエルバッハと比較すると，スミスの魅力はどのようなところにあるのでしょうか。

山辺　フォイエルバッハというのは個人原理として考えるとすごく好きなんですけどね。これは，大体一般的に言われることだと思うんですけど，ドイツ観念論（特にヘーゲル）の場合，個別・特殊・普遍のうち，特殊の部分が弱い。事実フォイエルバッハの場合も社会というもののイメージが消えていて人間と自然という二項関係でものを見ている。その間の社会というような人間が造ったもの言い換えれば特殊の領域はフォイエルバッハの中では自立しない。同一哲学を拒否しているというところがあるんでしょうけど。スミスの面白さというのはそこの部分で人間というものを考えていけるというところがあります。自然と人間というよりも社会と人間というスタンスで人間学を考えられるという点では，スミスの方が社会の中の個人が見えてフォイエルバッハの人間学とは違う面白さがある。フォイエルバッハの人間学は社会の中の人間というのがどうも見えてこない。その辺が食い足りないと言えば，食い足りないですね。研究叢書の一番後ろのところで，マルクスがフォイエルバッハに書いた「1844年8月の手紙」の中でマルクスはフォイエルバッハが共産主義の原理を完成していると書いている。全ての人がばらばらで現実的に違っていて，その違った人間が作り出す共同体こそが共産主義なんだということをマルクスはフォイエルバッハに手紙を出しているんです。そういう現実的な相違というものの上に成り立つ共同性こそが本当の共産主義なんだという話をするんです。現実のマルクス主義の歴史を見てみると，そこが全部排除されて共同性というものができてくるというのが普通です。その現実の違いの上に成り立つ共同性に拘っているのはどちらかというとスミスなんです。スミスとかイギリス経験論の方がはるかに強くて，そういう見方で見た方が面白いですね。研究叢書のあとがきのところでマルクスの後ろにスミスをもってきたらという話をしたのは，そんな文脈で考えていたことなんです。

橋本　仕事の展開はおおよそそうなっているんじゃないかな。

山辺　そうですね。それで，今，ヘーゲルをそっち側へ読み替えている。

橋本　それが最近の10年の研究ということだね。

山辺　そういうことですね。

橋本　法文学部から経済学部が分離する頃から，山辺さんとは話をするようになった。僕の立場からすると，法文学部は非常に住み心地が良かったんですよ。僕は文学部の出身だから，まさに法文学部経済学科には不満がなかっ

た。だから，経済学部を作るのにことさら熱心さを示す必要はなかった。山辺さんはどちらかと言うと経済学部の分離に批判的だったような気がしたんだけれども，それはなぜ。

山辺　そうですね。僕がやっていることというのはそれほど経済プロパーというわけじゃないでしょ。あの頃，田中加夫さんなんかとあの人の哲学の演習に出てハイデガーのテキストを読んだり，カントの話をしたり，また，僕のところで田中さんと一緒にマルクスや宇野弘蔵を読んだりしていた。彼は宇野さんが気にいって，九州大学の滝沢さんの書いたフォイエルバッハ論なんかを使って授業で話をしたこともあったと思う。そういうこともあって，僕も哲学の談話会で話したこともあるし，だから，僕はあっちの雰囲気の方が意外と楽だったですね。経済は事実住み心地悪かったですから。

野村　経済学部を創設することに反対だったんですか。

山辺　積極的に反対というより，別に法文学部のままでいいんじゃないということです。これからの現実問題としては経済学部になっていかなければならないということはわかっていたけど。

橋本　ただ，共通しているのは，僕も文学部的な，ああいう研究だとか考え方には親近感あったけど，わけのわからない法学部的発想から離れたいという気持ちが強かったと思う。そこはたぶん共通していたんじゃないかな。

山辺　そうだね，文学部とならいいけど。

橋本　ところで，今の研究的展開の関係でカナダへ留学されましたよね。トロントでしたか。それは山辺さんにとってどういう位置を占めていたの。

山辺　あれはミルをやりたかったんです。僕はスミスを終わらせてミルをずっとやっていこうかなという気持ちで行ったんです。ただ，ミルをやっている間に，やっぱりミルよりヘーゲルに戻りたい，という気持ちが強くなってしまった。これはフォイエルバッハのキリスト教批判に関する修士論文を書いた時に，一方でヘーゲルの神学論文を読んでたんですね。これはとってもじゃないけど書けないと思って僕はギブアップしたんです。それで，フォイエルバッハのキリスト教批判をやったんです。ヘーゲルの神学論文というのは，僕もやりたいと思いながらもできずに，挫折したという気持ちはずっと持っていた。いつか僕もやりたいと思っていた。それで，少しずつ読み始めて，やっぱりやってみようと気が強くなった。『濫觴』創刊号に「偶成」という文章を載せたのがそれなんですが。自分では「偶成」としたんですけど，相当時間をかけて考えてたんです。もう一回ヘーゲルができるかもという気持ちになって，あれから，論理学，精神現象学をやったんです。本当は論理学に入りたかったんだけれど

も，学生が論理学にはとってもじゃないけどついてこれなくて，最終的にはやれずに終わっちゃった。

橋本　その転機は，留学中あるいは帰ってきてからですか。

山辺　その間くらい。ずっと迷ってた。スミスを書き上げてからは殆ど間を空けずに移ったと思う。留学に行ったのは1984年か1985年だね。

橋本　金沢大学の研究成果に区切りをつけるような近著の原稿が最近上がったようですが，その近著のタイトルと大体の内容について話してくれませんか。

山辺　タイトルは『ヘーゲル『法の哲学』に学ぶ』というんです。「自由と所有，そして国家」というサブタイトルをつけようかと考えています。結局，法哲学だけの話になってこまった。本屋から言って来たのはヘーゲルの入門書を書いて下さいということだったんです。でも，僕はそんなものは書けないと言って断ったんです。ただ僕はちょうど経済思想史の講義をもっていて，その授業でここ何年間かずっと法哲学の講義をやってきたんです。だからそっち側のまとめをしようというところまで来ていたので，それだったらできると言ったんです。そうしたら，それをお願いしますということになってしまった。ヘーゲルの法哲学というのはどうしても長い間そこでの国家論のイメージが強くて，国家主義，全体主義という印象をもたれることが多かった。最近は，それは変わってはきてるんでしょうけど。ただ国家に関する議論に対しては，まだクエッションマークを付けて読むというのが多いと思うんですね。僕たちが学生時代からずっと読んできた読み方も，市民社会論を中心にして読んで，欲望の体系というかそこら辺をヘーゲルの法哲学の全てみたいに考えがちだった。国家論に入ったら，マルクスなんかがぼろくそにたたいて，もうどうしようもないものとして，切り捨てられていた。そんな印象をもってきたんですね。それをちょっと変えたいなという気もあった。ヘーゲルがなぜ国家というものにこだわるのか，それを歴史の継承という問題の中で考えられないかなと。リッターが『ヘーゲルとフランス革命』の中で「由来としての歴史」という問題を取り上げて，イギリス古典経済学を１つの鍵にして２つをつなげていくという話もありますけれども，必ずしもうまくいっているというふうには僕は思っていない。歴史の継承というのは，やはり今一番重要な気がします。ブッシュのアフガニスタンやイラクへの侵攻，あれを見て，一層書かなければならないと思った。国というのはそんなに簡単にできるものではないという気持ちが僕の中にはあるんですね。我々，戦後民主主義で育ってきた人間というのは国家というカテゴリーはすごく苦手なんです。僕たちは国家といった瞬間にアレルギーがあ

るんです。国家というのはもう直きいらなくなって消えていくものであって，人類史一般でぱっと上がっていくというパターンでものを考えてきた。一回，国家というところでものを止めて見ないと，ものを見れないのじゃないかという気持ちがあるけど，ただ止め方が問題で，変に止めちゃうと，どうしようもないものが出てきちゃう。つい何年か前のことですけど，パブリックメモリーという言葉が言われたことがある。あのパブリックメモリーというものを本気で自分たちで作っていくという歴史研究を我々はしていないという意識があって，そのためにも国家を捉まえておく必要があるんじゃないかと思っていた。歴史の継承というところで，国家というものをもう一回考えられないかと思ってたんです。ヘーゲルが国家を持ち上げる時の議論というのは，倫理というものが近代において姿を現そうとする時の一種の形式として，これを捉えている。近代に置かれるというのはどういうことかというと，近代というのは自由とか，理性とかが働いている世界だから，そこに倫理というものを置くということは，自由や理性で倫理の形式を整えることになる。そういうものとして国家というものを造っていけないかというのがヘーゲルの国家論のテーマだと思うんです。そう考えてみれば，我々がかつてぼろくそにたたいた国家というものを逆に今もう一回持ち上げることができるのではないか。たとえば，イラクなんかにしても，彼らはずっと古くからの倫理というものを持っていて，イスラム教とかを持ってきているんだけど，彼らの一番の失敗というのは，近代国家というものを造っていない，そのためにそこに倫理があるということすらも西欧社会の人間から見てもらえない。それが1つの大きな欠点だったと思う。だからと言って，そこに違うものを放り込んで国家を作れと言っても，それは無理なんです。そこのところで，我々近代人にわかる言葉でそういう倫理がありますよということを見せないと，つぶされてしまう。プロイセンなんかの場合だって，そうであって，自分の古臭いものをもってきていて，あることはわかってるんだけど，それが世界市場に放り込まれた時にやっていけますかということになる。こんなものはあっという間に吹っ飛ばされる。そこから〈ドイツはもはや国家ではない〉という議論が始まった。こういうコンテクストでずっと国家論を作り上げていくと，ちょっと違うイメージの国家論ができないかなと思って。

野村　ヘーゲルの人倫国家論では，国家がそういう倫理の体系として成立するためには，家族をふまえた市民社会というのがあって，そこでフュア・ジッヒに国家と自分自身との関係を考えることができるような近代的市民の成立が前提されるわけですよね。いま

アフガニスタンとかイラクの話が出たんですけど，ヘーゲルに言わせれば，あそこはオリエントで，そういう近代的な人間が成立していない。だから自分たちで専制支配をつきくずすことができず，人倫国家を立ち上げることができないという議論になるんでしょうか。

山辺　僕はそこまでは言わないですよ。それが前に出すぎるとブッシュが肯定されてしまう。国家というのは常に不完全なもので，それは仕方がない。ドイツなんかの場合だって，古い自分たちの倫理というものを持っているかもしれないけど，それが世界市場の中に放り込まれた時に，そこに自分たちがいるよというアイデンティティをどうやって維持するか，世界市場の中で。概して，世界市場の中でのアイデンティティということについては，ヘーゲルも市場認識を非常に正確に持っていて，価値対象性という１点にかかわらせて見ている。だから，自分たちがどういうものを持っているか，世界市場で必要とされる価値をこの地域は持っているかいないかという，貨幣に対する対象物を持っているかいないか，という感じでしか地域を見ないというか，その中で地域ごとの区別が造られて地域わけが進んでいって，国家とかそれぞれの地域がもっていた倫理なんかは全部吹っ飛ばされていってしまうと考えている。だから，それをなんとかしなければならないという意識があったでしょうね。ドイツはドイツなりにドイツの歴史を持ってきて自分たちのアイデンティティを持ちながら世界市場の中で生きなければならない。まあ，大体そんなイメージですよね。

弁納　今の点とは，話が変わるんですが，この機会に山辺先生にお聞きしたいのは，1970年代や1980年代の中国社会主義について感じたこと，あるいは，山辺先生の研究上に中国の社会主義が与えた影響についてですが。前におられた内山先生の講義に山辺先生が出席されたということを聞いたことがあるんですが。

山辺　そんなことを聞かれても困るんだけど，単純に言うと，僕たちは1960年代後半くらいに文化大革命を見ていて，ML派というのはマルクス・レーニン派ではなくて，毛林（毛沢東・林彪）派と受けとられた程，紅衛兵運動や文革に対して我々は万歳だったですよ。中国共産党に対する幻想をずっと持っていた。あの学生運動の終わりの1960年代後半もそうだったんです。よど号ハイジャック事件で北朝鮮に行くけれども，行かなければならないのは本当は中国だろうと僕らは皆思っていた。やはり中国共産党というのは世界共産主義運動の１つの核になるという思いがあった。

弁納　やはりそういうふうに思われたのは，ソ連の社会主義に対する失望ということがあったんですか。

山辺　ソ連の社会主義に対する期待はとっくの昔に消えています。これはハンガリー事件くらいから消えています。唯一残っていたのが中国なんですね。キューバもだいぶ残ってましたね。

弁納　そういう点から言うと，1989年の第二次天安門事件というのは大きなショックだったんでしょうね。

山辺　だから，あの時，僕は内山君の授業を聞きに行ったんです。たしか1989年に天安門事件があって，僕も中国を勉強しなければならないと思って内山君の授業を聞きに行ったんです。だけど，中国というのはこんななんだと知った瞬間に，僕はすーと熱が引いて……。

橋本　さて，話を少し元に戻すと，近代社会における倫理みたいなものを問題にする時に，山辺さんの中では前近代における倫理だとか，あるいはそれとの連続性だとか，そういう問題はどういうふうに考えますか。たとえば，日本の場合は，いわゆる通俗道徳というような考え方で，社会体制の議論とは違う形で，広い意味での倫理観みたいなものと国家の形成と関わらせるのか，関わらせないのかという議論があって，そういう問題を考えると，ある程度前近代・近代を連続的に意識している。

山辺　その辺までは，僕には厳密には分からないですね。ただ，倫理というのは生きているというのが前提ですね。生きているということであれば，これは常にそういうものが現実の社会の中で構造化されている。そういうものとして変更を被ってこないと，どうしようもない。生きている善という言葉をヘーゲルは使ってはいるけれど，善かどうかは別として，生きているということ，そしてそれはいつも変わっていくということ，そういう気持ちは僕は分かりますけどね。

橋本　最近のアメリカの独善主義の問題から言うと，1945年までは日本に対するアメリカの見方にはまだ許容力があって，対日政策を推進していたが，今回のイラクの場合は全くそういう幅がないままに山辺さんが言うところの国家みたいなところにいってしまった，そういう問題があるんじゃないですかね。

山辺　法哲学の中でナポレオンの話をするんですね。ナポレオンがスペインに民主的な法律を放り込んで，そこで押さえ込もうとする，その辺を批判するところがあるんですが，法律，立法というのはやはりその国の習俗に根ざして出てこなければならない。立法というのはそういう習俗がずーと形を作り上げて，理性的な，合理的な形を整えてくる時のものなのだという話をするところがあるんです。憲法をコンスティチューション・体質ということで考えると，それが1つの地域ごとの体質みたいなものを形づくってくる。その延長上に国家というものを考えなけ

ればいけないのに，ナポレオンは強引にそこに違うものを放り込んできた。正しいからと言って放り込んだ。これは全くナンセンスです。こういう格好で批判するところがあるんですよ。それは全くその通りであって，今，ブッシュたちがやっているパターンにはそんなところがある。イラク戦争とかあの辺の話を単純化してしまうと，これは今の近代社会の矛盾が吹き出した形とも言える。共時的な社会観や，共時的な意思決定システム，つまり通時的意思決定から自由になって共時的意思決定システムへ，というのが自由主義社会の特徴だと思います。歴史を排除するからこそ可能な考え方です。ところが，今，その共時的意思決定システムに依拠している西欧近代社会というのは，あるいは日本なんかも含めてなんですが，彼らが依拠しているものというのは唯一中東の石油なんですね。ここに依拠しないと進歩ということを持ってこられない。進歩という言葉を担保にしてこの共時的世界を維持しているのに，それが天井にぶつかってしまう。今彼らにとって一番のネックになっているのが石油という問題で，その石油をかかえている部分というのが，最も通時的な意思決定システムの中に縛られているイスラム世界である。極めて皮肉なところだなと思っています。だから，今のアフガニスタンやイラクでの戦争というのは，あまり派手さはないが，今までよりはるかにきつい戦争です。第三次世界大戦のようなイメージで僕なんかは考えているんです。

野村　今のイラク戦争でアメリカの念頭にあったのは，敗戦後の日本の再建のあり方だと言われますが，最近読んだ『民主と愛国』は，読み始めたらやめられないくらいおもしろかった。敗戦後の日本の国づくりは，山辺先生の見地からいうと，どう考えたらいいんでしょうか。

西田　山辺先生に質問したいんですけど，世界市場という言い方をしたり，共時的な世界という言い方になったりするわけですけど，その場合，常にヘゲモニーを握っている支配的な国家，今だったらブッシュのアメリカですけど，アメリカの基準でしかないのに，グローバルスタンダードという言い方がされて，あたかも世界市場に入るというのはそれに合わせるということ，いや合わせなくちゃならないんだというような形で強引にやってきますよね。それは，マルクスの時代でも，ヘーゲルの時代でも，スミスの時代でも，やはり支配的な思想というか，そういう支配的な国家，帝国主義的な国家がグローバルスタンダードと必ず言っているわけですよね。その時，山辺さんが考えている支配的な国家ではない方の国家，支配される方の国家とはどういうイメージになるのか。国家論として。

山辺　世界市場とか共時的うんぬんと

言ってますけど，たしかにヘーゲルという人はこれはあの当時のドイツの人が皆そう思っていたんですけど，イギリス古典経済とは言うけど実際は国民経済学・国家経済学だと考えている。イギリス人たちは古典派というのをもっと一般的なものだと思っていたのかもしれませんけれども，ドイツとかそっちから見たら，古典経済学は国民経済学なんですね。だから，彼らからしてみれば，これはイギリスがやってきている議論だと皆はっきりと思っているんですよ。経済というのは所詮イギリスなんだと。さらに，一方では，ナポレオンが世界征服を企てている。政治的にはナポレオンの政治権力と経済的にはイギリスの強大な経済力，この2つの力でずーと一元化していく，そういう流れというのがあって，そこで，ヘーゲルは両方に対してチェックしていこうと考えているんだと思う。今までは，どちらかと言うと，フランスとかナポレオンというところがヘーゲルにとって相当大きな対抗相手になっていると思われているかもしれないけど，ヘーゲルは一方でイギリスに対して相当はっきりとした意識を持っているし，彼は，ずーとイギリスの研究をやっているんですね。イギリスの救貧法の問題から議会制の問題まで，相当細かい議論を調べていて，イギリスについてのチェックはかなりやっていると思います。イギリスの経済学についても，スミスも，スチュアートも両方を読んでいるし，ですから，西田さんが言われたような問題というのは，ヘーゲルの中にあるとも言える。イギリスやフランスのすすめる世界国家に対する批判として個々の国家の葛藤の中から世界精神の実現の道をさぐる，これがヘーゲルだと思います。だから個々の国々はこの世界精神の担い手へと自らを陶冶するものと言えると思います。市場認識としては，ヘーゲルはおそらくほとんどマルクスと同じ物を持っていると僕は思っているんです。マルクスがあんなにヘーゲルをたたく理由というのは，全てそこにある。社会認識や市場認識という点では，ヘーゲルは当時のマルクス以上のものを持っている。ただ一点だけマルクスとヘーゲルがまるっきり違う点というのは，片方は貨幣をポジに見るのに，片方はネガに見るという，唯一そこが違うんです。だから，なんでマルクスがヘーゲルを乗り越えられたという気持ちになれたかというと，貨幣の物神性を言ったからだと思います。それまでそれができなかったから，マルクスはほとんどヘーゲルが書いたままだった。だから，必死になってヘーゲルをたたいたんだろうと思うんです。ヘーゲルという人はスミスの世界とその前にスチュアートの経済学を勉強している。スチュアートの経済学というのは，マルクスが評価するように，価値形態論とかそんなものにも行けるような議論をはっきりと持っているんで

すね。市場というものの持っている怖さということを意識した男ですから。それだけスチュアートの方が現実的な問題を扱ってるんです。このスチュアートの世界，価値物の世界市場とスミスの有用物の市場と，この2つを貨幣を使ってヘーゲルはうまく合わせて自分の世界観を作っていった。これはちょうどマルクスが見ている市場認識とほとんど同じなんです。だから，『法哲学』というのは本来は経済学をやっている人間が読んだら，非常におもしろい本だというふうに僕はずーと思っているんですけどね。あれはほとんど『資本論』だよなと思ってしまう。今，『資本論』を読まなくなったんだから，『法哲学』を読んだらと思う程です。そして最後の「国家」のところをそういう文脈で読んでみれば，もう1つ『資本論』とは違うものが見えるかなという気持ちもあるんです。

橋本　さて，時間の関係もありますので，ここで少し教育について，教育者としての山辺さんに焦点を当てて，話してもらおうと思います。簡単に言えば，経済学部随一の教育熱心な教師と言えるんじゃないですか。それはほとんど異論がないと思いますけど。そういう点で言うと，経済学部に対する，あるいは経済学部生に対する愛情というか，特に受講生に対するアフターケアがうまいというか，力を注いでいるよね。だから，受講生は山辺研究室の戸をたたくという機会はかなり多かったと思うんですけど，その辺のところをエピソードを交えて少し話していただければありがたい。

山辺　そんなことを言われても。普通じゃないんですか。

橋本　いやいや。全ての受講生が戸をたたくというのがゼミ生と同じじゃない。そんなに皆はやってないよ。

山辺　そうかな。これを僕は今度の本でも「はじめに」の部分で書いたんですけど，僕は出口先生のとこでずーとやってたんですけど，出口先生が思想史をやる時の注意として，第一にプロになれというのがあるけど，しかし思想史というのはアマチュアの心を捨てたらできませんと言われていた。これはその通りだと思う。僕が今まで35年くらいここにいて，たしかにいろいろなことがありましたけれども，案外楽しかったなあと思ったのは，読んでた人間というのがおもしろいんですね。スミスにしても，フォイエルバッハにしても，ミルにしても，ヘーゲルにしても，マルクスにしても，皆一級の人間ばっかりだし，超一流の思想家ばかり読むことができて楽しかった。やはりそういう楽しさというのは，論文を書こうと考えたらおもしろくないんですね。本当に読んでいておもしろいなと思うのは，そんなんじゃないと思う。そんな面白さを学生と共有したいという気持ちはあったかも知れない。スミスだって別に論文を書く人のために文章を書いてるわけじゃないし，マ

ルクスだってそうだし，ミルだって『原理』は労働者に読ませるために廉価版まで作ってる。そんなものは研究者だけが読むようなものじゃないですね。これはよく学生に言って，笑われるんですけど，リカードが『国富論』を初めて読むのは，彼が嫁さんを湯治場に連れて行って，その時に移動図書館が来る，その中に入っていたのが『国富論』なんですね。それを初めて彼はそこで読むんです。湯治場に『国富論』が出てくるというのは，大体今の片山津温泉にそんなものあるかよと言ってるだけど。今，僕たちはそのへんを忘れているような気がする。やはり本を読む喜びというのは，意外とそんなもんだろうと思うんです。皆さんもそうだろうけど，こういう仕事に就いた1つの動機というのは，本を読むのが好きだったとか，本ばっかり読んでいてとか，というのが最初に大学院に残った動機だろうと思うんですね。

西田　本当にそれ以外に動機はなかったんですか。

山辺　それはありますよ。だけど，本を読むのは好きだった。

野村　本を読むのが好きで，それで学者になったというのはわかりますが，ご自分が読んだものを学生にきちんと与えなおしてやるところが山辺先生の偉いところです。私たちは，自分が読むことに夢中になると，時間が惜しくて，学生の世話は，正直に言うと，時々負担に感じますものね。

山辺　おもしろいという目を残してくれているのは，おそらくそういう学生たちの素人の目なんです。僕たち，そこをはずれると，おもしろさというのは消えちゃうんですよね。フォイエルバッハがおもしろかった，スミスがおもしろかったと自分の中で読んできて，あいつらと付き合えたのは，よかったなと思えるし，学生たちの目みたいなものを借りながら，いつも読めたし，そっち側がなかったら，つまらなかったんじゃないのかなという気がしましたね。これもヘーゲルが言っていたんですけど，自分が靴を選ぶ時に，靴職人にならなくてもいい，専門家にならなくてもいい，自分で履いてみればいいと言うんです。そういう話をするところがあるんです。だから，社会というものに関心をもっていれば，社会は自分の中に入ってくるという話をする。僕も原則的にはそういう気がするんです。だから，一見わからないような話をしているかもしれないけど，学生たちだって本当に追っかけてみればそういうものを持っているはずなんだし，あるんだよなと思ってしまう。実際議論していけば大体あるんですよ。

橋本　それをいわば教育における山辺マジックみたいに，経済学部生の何人かそれにかかる学生がいるんだよね。それが経済学部はまだ捨てたものじゃないという論拠のひとつです。時々話していて僕のゼミ生も何人か山辺研究

室の門をたたいていて，よくわからないけど，山辺先生の話を聞いていると，何かちょっと心にかかるんですよねとゼミの時にふと漏らして。僕がちょっとこいつはおかしなやつだと思っている学生と山辺さんの部屋に行っているやつと大体オーバーラップしてるんだよね。この「おかしな」というのは，我々が相当に評価しているという意味だけどね。そういうのがかなりたくさんいましたよね。

山辺　ここの学生は決して少なくない。

橋本　それはやはり山辺流教育マジック。

西田　僕のゼミでも，山辺先生の授業や基礎ゼミのつながりで今山辺研究室から帰ってきたというのが何人もいましたよ。

野村　でも，それだけでなく，いろいろとトラブルを起こした学生とか，他の先生のゼミにいられなくなった学生とか，そういうあらゆる学生を最後に引き受けて世話してくれたのが山辺先生で，本当に困った時の山辺先生でした。そういう学生は，精神的にもいろいろと悩みを抱えていて，先に先生がおっしゃったような高級な議論以前の学生もずいぶんいたと思うんですけど。最終的に先生のところで卒業させてもらった学生というのは，かなりいるんじゃないでしょうか。私が教務委員をやっていた時に，希望のゼミの抽選にはずれて，荒れてどうしようもなくなった学生を最後に引き取ってくれたのも山辺先生で，山辺先生のいらっしゃらないこれからの経済学部は，どうすればいいのか。

山辺　そんなたいそうなもんじゃないです。

橋本　それはさっき西田さんが問い詰めたように，研究以外にやはり大学で教師という商売もおもしろいと思った動機が何かあるんじゃない。

山辺　でも，あの頃は，教師として大学に残るか残らないかという時に言われたのは，アカデミズムで残るんですか，職業革命家になるんですか，その２つでしょ。そのどっちですかという形で言われることが多かった。職業革命家というのは今ほとんど死語ですけどね。だから，セクトとかは過去問（過去に出題された問題）をずっと持っていて，自分たちのセクトのところに行く学生を大学院に集めていた。あの当時はそんな感じだったと思う。ちょうど1960年頃，学生運動をやってきた連中ですから，それはそんなものだったですね。

橋本　それでは，時間もおしてきたので，最後に３つ目の35年間の大学生活についてお願いします。

山辺　暴露しろということ。

橋本　これがなければ，山辺さんの人となりを浮き彫りにできない。もうかなり歴史の後ろに消えかかっているんだけれども，やはり山辺さんの大学における35年間を語る時には，助手時代

に山辺さんが出した問題というのはかなり大きいものとして僕自身の中には残っているし，その点で今は山辺さんを高く評価しているんです。起こったことは結局『金沢大学50年史』に書けなかったので，簡単に言えば，助手の権利闘争をやって助手会を作り，法文学部長室を3週間占拠した。1971年11月，僕が金沢大学に就職した直後だったけど，いまどきこの大学はいったい何をやっているんだと思った。大学の中において助手というものの役割は何なのかということを教授会に問い詰めながら，結局，大学という職場なり，環境なりというのは何なのか，どういう役割を持っているのか，ということを個々人の教員に問いかけているんです。したがって，これは，大きく言えば，大学の自治というものを問い直している。やはりこの点は思い起こして語ってもらいたい。

野村　基本的な問題は何だったんですか。

山辺　それは橋本さんがおっしゃるとおりだったと思います。

野村　金沢大学に，いわゆる助手問題というのが存在したんですか。

山辺　一番最初に出てきたのは，国文の助手罷免問題というのがあったんです。僕がちょうど来た年，1969年2月初めに自衛隊の飛行機が野町に落ちているんですね。その時に，僕はまだ京都にいたんですけど，ここの文学部の学生の自治会なんかが中心になってデモを行なうんですけど，デモをめぐって大学の中でも相当荒れるんですね。その時の中心的なメンバーというのが国文とか文学部で，その国文の助手をしていた人が古屋先生で，もう何年か前に定年でやめられた方です。彼が助手をやっていて，それまでの約束では1969年3月いっぱいで任期があって助手をやめるという予定になっていた。泉が丘で高校の先生をやっていましたので，自分はそのつもりで泉が丘に帰ろうと思っていたんです。その頃，川口先生という方がいらっしゃって，川口先生が残ってくれと言ったので，4月以降もこっちにいますというので，教育委員会の方にも連絡を出したんです。ところが2月に事件が起こって学生たちも騒いでうるさくなってきた。教授会の方ではいろいろと学生の情報がほしい。しかし古屋さんはそういうのは知らないし答えられない。だったら，もう少し若い人の方が情報が入るかもしれないというのもあったのかも知りませんけど，突然もうやめてくれという話になったんですね。僕がきたのはちょうど4月の終わり頃だったんですけど，その時にはすでに学生たちがそれに対してノーという話をして，古屋さんは一応残っていたんです。そこで，急いで助手会を作ってそれについて教授会に質問状を出して動きを始めたというのが助手会の発端です。それがだんだんとエスカレートしていくんですけれども。

橋本　その時に，僕はいきなりその教授会のメンバーになって，その立場から言うと，ちょうど教授会があの頃の言葉で言うと，教授会一本化という言葉を使っていて，教授教授会と助教授・講師も含めた学部会と２つに分かれていて，人事と予算は完全に教授教授会が握っていて，それを一本化するという教授会の「民主化」の流れの中で，なおかつ助手が権利闘争をするという，やや複雑な情勢を生んでしまったんですね。

山辺　それが非常に困った問題で，ですから，助教授・講師会の先生方はさっき橋本さんが言われた，法学科の古い人たちをたたくためには，教授たちや教授教授会の無能さみたいなものを明らかにして，助講会の方がはるかに能力があるということを示して，それをテコに権力を取ろうという感じで動いていた。僕たちの力が教授教授会の方に向かっている時はうまくいったんですが，助講会が教授会の前面に立って助手たちの前に出てきたため，両方とけんかになってしまった。特に激しくなったのは助教授・講師と助手会の間の対立でしたね。その上こっち側の人たちは組合に入っていたし，それで僕たちは組合とけんかになってくるんです。あの頃は，組合の大会といったら，荒れてて一回では終わらなかったですよ。年が明けたこともあった。ちょうど渡邊力さんが書記次長か書記長をやっていた時，年明けまで大会を伸ばしたことがあったんです。なんだか全部がねじれてしまって，ねじれついでに今度は法学部の保守派の方が我々を支持するという，そういう感じになったんです。

橋本　反対のための反対になっちゃったんだね。

西田　その時のテーマは何だったんですか。

野村　罷免闘争ですか。

山辺　そうです。任期を恣意的に利用して合法的（？）に罷免されては耐まらないというのが僕たちの立場で，だから，助手の任期撤廃が争点になった。

野村　最後までそれが争点ですか。

山辺　そうですね。罷免の問題は，さっきの国文助手罷免の問題です。それに対する自己批判と，そういうことは今後一切しないということの保障として任期をとるという，そういうことを僕たちが法文学部教授会に出して。

野村　それで，落としどころはどうなったんですか。

山辺　任期がなくなったんです。僕たちが座り込みをやって，３週間程たって決まりました。自己批判はなかったけど，僕たちは座り込みを解いたんです。ちょうど３週間でした。

橋本　もちろん，そのねじれ現象というのは残るんだけれども，妙な形で大学の自治論みたいな問題で重なった部分が出てきたんで，大きく言うと教授会の一本化というのが法文学部が最初

になって，教育学部も理学部も一応成し遂げた。ねじれが解ける段階でそういう副産物が出るというのは僕には予想だにしなかったけど，あれは非常におもしろかった。このねじれがある程度解けたので，角間への移転問題が必ずしも深刻な問題にはならなかった。これで金沢大学が空中分解するというところまではいかなかった。

野村　もうその頃から角間への移転問題というのはあったんですか。

橋本　後半の段階であった。

野村　後半というのは何年くらいですか。

橋本　1977年か1978年頃かな。

野村　でも，移転の話があってから，移転するまで10年かかっていますが。

橋本　角間移転問題が明確になってくるのは1978・9年で，1980年に三学部分離の概算要求が認められた。三学部の分離ができたということは移転問題について基本的な問題をクリアしたということでしたね。

野村　私が金沢に来たのが1989年4月で，その時には，組合がまだ移転反対というようなことを言ってた。

山辺，橋本　それは教養部のこと。

橋本　経済学部ができた時，助手問題も教授会の教授問題もほぼ争点は少なくなった。ただ，あえて言うと，やはり研究助手の問題は避けたんだよね，経済学部としては。これをやれば，今博士課程設置まで来たわけだから，問題としてはまだ片付かなかったかもしれないけど。それが経済学部では不思議なことに，学部を作り，マスターを作り，ドクターを作りと，年次進行で来たから，助手の研究職としての意義ということを本格的に議論しないうちに助手の定員がなくなっちゃった。

山辺　だから，その時にも経済学部の場合には，教授，助教授，講師，助手というラインから助手をはずすということを確認したんですよね。

野村　つまり，昇進無しの事務助手という扱いですよね。

山辺　事務助手というよりは，その助手というのをその専門の人として考える。こういうラインの中で考えるんであれば，皆講師以上で採る。そういう人は助手では採らない。それで，こっち側の助手の人たちは，違う専門職をやってもらう。

野村　その代わりに，任期もつかないんですね。

山辺　ということで，我々も一応納得した。だから，教授会に出るというのは，その時点ではなかった。

橋本　それは，1980年代後半以降の移転後の問題で，経済学部ルールみたいなものが大体出来上がってきた段階だけれども，そこからやっかいな問題が，今それを一気に飛ばしちゃったけど，修士を作り，博士課程の研究科を作り，その時に僕は管理職をやってたので，何か問題が教授会レベルで起こった時に，山辺さんの研究室に行って，もちろん問題をどう解決したらい

いかなんてというストレートな相談はしなかったけれども，いろんなヒントを得るという議論はずいぶんやったね。

山辺　ずいぶんやったね。

橋本　僕にとっては非常に有益だった。

山辺　橋本さんと僕というのは，前にもお話したように，殴りあう寸前までやってたんだけど，橋本さんの方は政治的にはずっと上で，僕なんかは単細胞ですから。彼は学部分離の時かな，僕がずっと長い間助手をやっていて，僕をプロモートするかどうかという時に，学部分離する時には，貼り付けというのがあるんですね，講師貼り付けとか，助手貼り付けとか，その時に，まだ青写真で，実際の問題じゃないから，僕を講師に貼り付けたんですね，いよいよ学部ができて，これが現実になるという時に，教授会で人事をやっていかなければならないわけです。その時に，橋本さんが来られて，今までのことは全部水に流そうという格好で話をされた。そう言われてしまったら，こっち側もけんかをするわけにもいかないしなあという感じになった。以前まだ学部打ち合わせ会というのあった頃の話だけど，僕のプロモートがどうのこうのというのが一回出たことがあったんです。そうしたら橋本さんが，「だったら山辺の学生時代や大学に来てからの全部の自己批判書を書け」って。それに対して「ここは査問委員会か」という感じだった。

橋本　それはもう灰皿が飛ぶ寸前だったよね。

野村　それでは，山辺先生は学部が分離した時に講師になられたんですか。

山辺　そうです。

橋本　経済学部を作る時だよね，もうやめようということになったのは。大学にはもともとそういう土壌が明らかにあって，普通なら3週間も学部長室を占拠して，そんなに簡単にプロモートなんかしないんです。戦前の帝国憲法をまだ授業で教えているような法学の先生なんかいた時代だから。試験は旧仮名づかいで書かないと絶対に「優」を与えないというような先生も教授会にいたわけだもの。だから，法文学部分離の際に一気に正常化するというのは僕の大学自治論から言うと極めて自然だった。ちょうど山辺さんの精神的な流れと合致した。うまく波長が合ったわけです。

山辺　彼は歴史家ですから。歴史は歴史家が造るものらしいですから。

野村　山辺先生が最初に助手だった時は，研究助手だったんですか。法文学部の研究助手だったんですか。

山辺　そうですね。その当時，法文学部で助手が10人あまりいたんですけど，研究助手として用意されていたのは，今英文にいる本間さんと僕の2人だけだった。

野村　もし学部分離とかがなくて，法文学部のままだったら，助手から講師

へと昇進するような地位だったんですか。

山辺　そうなんです。一応講師以上のポストを持っている助手ということで。

橋本　だけど，そうやって上げないという，研究外的要因があったから話がやっかいになった。

野村　助手問題というのは大学紛争のときの1つの問題ですよね。

橋本　さて，最後に人間としての山辺論をそれぞれ語ってもらいましょう。僕が口火を切ります。僕が考えたのは大学の中に多趣味を持ち込む山辺さん。まずは野球でしょ。これで人間関係を作る。2番目は釣り。釣りという趣味を学部の中に持ち込んで強要はしないけど，見せびらかして人を引きつける。3つ目は音楽だね。尺八，ギター。これを大学まで持ってきて演奏し，多趣味ぶりを見せる。4つ目は，京子さんを自分のパートナーとして非常に尊敬するという「愛情」を大学の中に持ち込むということ。僕はこれは趣味の域にあると思う。4つの趣味を大学の中に持ち込む山辺さんというのが，僕の山辺人間論なんです。では，1人づつどうぞ。

野村　でも，これで総括になっているんじゃないでしょうか。内山さんが，最終講義に花束を持って来たいんだけれども，やはり山辺先生にではなくて京子さんに渡したいよねと，私宛のメールにはそのように書いてありましたよ。

中島　山辺さんが教授会に出てくる時の雰囲気というのは，本当にいつも真剣勝負で出てますよね。だから，最近山辺さんが段々と後進に譲るという形で発言を自粛されて，それが奇しくも大学の法人化の流れの中で，大学が大きく変質しようとする中で，そのプレゼンスが次第に薄れてきているというのが残念でもあるし，後を託された私たちとしては焦慮感にかられるというところがあります。大学自体を共同体で語るということができる稀有な一徹さがあり，それをしかもヘーゲルで裏付けて語るというところに迫真さがあったというか，だからこれからもずっと教授会で発言してほしいなと思います。何か実務的な話になってきて，もう教授会自体が意思決定の場でなくなってきて，自治うんぬんとか，先ほどの助手の話じゃないですけども，今は教員の権利そのものが危機に瀕するというところまできて，その転換点の中で去られるというのは寂しいというか，心細いというか，そうしたことをここ1，2年強く感じます。それまでの山辺さんの教授会の発言の重さというのが，逆に今僕らはわかるようになったという気がします。だから，これからの大学が共同体としてどうなっていくのか，山辺さんが何か考えて思うところがあれば，一言聞きたいなという気はするんですけど。

野村　それと，過去の経緯を正してく

れる人がいなくなるのがちょっと心配です。

橋本　それはちょっと怖いね。そんなことでひるむ山辺さんじゃないよ。

山辺　でも，もう僕たちは責任を持てないものね。

西田　たしかに山辺さんが教授会にいるかいないかで，その教授会が締まるか締まらないかというようなことがあるね。

山辺　全然関係ない。

西田　やはり原理原則から推してこうだということを言う人がいるという緊張感を学部長も持つだろうし，いや持たない人も中にはいるかもしれないけれども，僕は持ちますね。

山辺　そうですか。かえってはずかしいです。僕は悪いことばっかりしてきたなあという反省の方が強いです。

野村　最後に，私たちに残してくださる言葉というのを。

山辺　この経済史の講座というのは非常に居心地がいいですよね。楽しかったです。こういう仲間と一緒だったのは，本当によかった。林君は残念だったと思いますけど，その代わりに西田先生がきてくれたし。感謝してます。

橋本　ちょっと僕がしゃべりすぎたような気がしますが，それでは，この辺で終わりにしましょう。